

生活と観光のバランスを考える 視点と環境変化への対応 2000年代以降の「生活型観光地」由布院の取り組みを通じて

観光地域研究部 主任研究員 後藤 健太郎

大分県中部に位置する由布院は、我が国を代表する温泉地であり、住民主体のまちづくりを通じて成長してきた観光地である(写真)。機関誌『観光文化』(215号、223号)(注1)においても、地域の哲学やビジョンなど既に地域から紹介をいただいている。よって、今回は、2000年代前後から現在に至るまでの観光客の増加に対する対応の一端を紹介する。

1 定住人口と交流人口が ほぼ同じの町

由布院を含む旧湯布院町(現由布市湯布院町)の観光客数は、年間約

380万人であり、宿泊客数約90万人。日帰り客数約290万人である(2000年当時)。由布院温泉観光協会会長である桑野和泉氏は、由布院は暮らしの町であり、人口1万人の町(旧湯布院町)に年間380万人の観光客が来訪しており、1日当たりの交流人口と定住人口がほぼ同じとして紹介している(図1)。また、定住人口と交流人口については、その「バランスが不均衡になることで、景観や交通の問題が出てくる」(注2)と語っている。

民の観光に対する意識などの把握も一部の地域において進められているが、(以下、それぞれの数値の性格が異なるので一概には言えないものの)それぞれを個別に把握するだけでなく、そのバランスで捉えようとする視点は、今後我が国が持続可能な生活地域をより意識して取り組んでいく上で非常に重要だろう。生活と観光の共存を掲げる、住んでよし、訪れてよしを掲げる地域は増加したが、例えば、設定されている指標に関して言えば、観光に限定されている地域も少なくない。

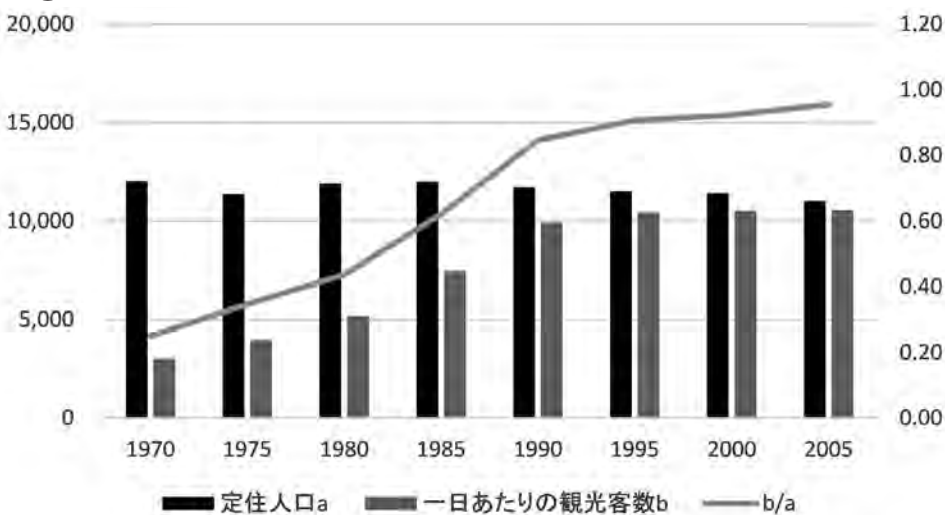
なお、まちづくりのリーダー中谷健太郎氏は、2000年代前半に、観光客に関して「2%ずつ減少を見込み、

5年で10%減」という目標を立ててコントロールできないか(注3)と提唱していたようである。このような捉え方を地域のリーダーが持っていたことは、特筆すべきである。もちろん、地域全体の方向性として、そうした考えをどのように地域の総意としていくか、刻々と変わる社会経済環境の変化などを踏まえながら実際どのように対応していくかは、今後の我が国の観光地において課題となるが、そもそもこうした考えを地域やリーダーが持ち合わせていない中では、自律的な観光地域の管理がどこまで進むかは疑問である。



写真 由布岳を望む風景

図1 旧湯布院町の定住人口、1日当たりの観光客数の推移



出典：「国勢調査」「大分県観光動態調査」より作成

2 観光で生計を立てている地域だからこそ 慎重な態度

観光地で観光客の増加や生活と観光のバランスを問題として扱う際に留意

すべき点として、由布院観光総合事務所の事務局長(当時)の米田誠司氏は、「観光地というお客様に来ていただきたい生活が成り立っている町が、お客様の数を制限するという言い方は到底できないと思いますし、してはいけない」と思っています(注3)。(点は筆者加筆)と述べる。実態として、観光客の行動が地域住民の暮らしに正の影響だけではなく負の影響を与えていることはあり得るだろう。適切な制限が必要なこともある。とはいえ、観光で多くの人が生計を成り立たせている地域において、その課題や負の側面だけをことさらに際立たせて対外的に発信することは、市場に対してネガティブなイメージを与え、地域ブランドを自ら毀損(きそん)することにもつながりかねない。したがって、慎重な態度、行動が求められる。それは、地域関係者とどまらず、それを発信しようとする第三者も同様である。

3 生活と観光の均衡を模索する取り組み

例えば、近年「観光公害」や「オーバーツーリズム」という用語が多用されるが、その問題現象だけの発信、警鐘に留まると、そうした問題を抱えている地域としての印象を与えかねない。仮に使用するにしても、地域自身がそうした状態にあると一定程度の見解を示してからが適切だろう。

観光客全体、あるいは特定の客層の増加などによって新たな問題が生じたり、そうした観光需要の獲得を狙った地域外資本による参入によって、調和の保たれていた生活と観光の均衡が変化し、意識的な対応を模索していくこととなる。ここでは、主に交通・景観・空間に関する特徴的な取り組みの一部についてその概要を述べる。

① 湯布院・いやしの里の歩いて楽しいまちづくり交通社会実験の実施(2002年度)

観光客の自家用車や大型観光バスの増加により「歩いて楽しむまち」とは言えない状況に置かれていた旧湯布

院町では、2002年(平成14年)に大規模な社会実験を実施。多くの地域住民も参加して行われた。湯布院らしい交通のあり方について、何を目指したらよいか、何が正しい姿なのかを町を挙げて考え、方向を見いだすことを目的に4つの実験を実施した(表1)。観光客と地域住民が実際に体験した上で、両者の評価に大きな違いがあったことや、実験としては実施可能なメニューであったも、実際の実施には課題事項も多く、比較的合意形成が図られやすいものに関しては、積極的に実施に向けての展開を目指すことが望まれるなどの指摘が整理された。

② 観光環境容量・産業連関表分析調査及び地域由来型観光モデル事業(2006年度)

本事業は、由布院地域(中でも由布院温泉、由布院盆地の範囲)の産業構造(地域産業の主要な部分を占めると言われる観光業の規模、他産業との連携の度合いと経済波及効果など)を明らかにするとともに、1971年(昭和46年)以降、由布院地域中心部の土地利用の変遷なども併せて調査。本来の由布院の魅力が何であり、何を守り何

を変えなければいけないかを今後見極めていくために、約40年続いている由布院観光の成長の軌跡と、その成長・発展がどのような成果と課題を地域にもたらしているかを把握することを目的に、由布院温泉観光協会が由布院温泉旅館組合と連携して実施したものである。同事業では、持続可能なまちづくりの提案として4つの解決課題が示されている(表2)。

③ 湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定の策定(2008年)

2006年(平成18年)に湯の坪街道で起きた交通事故をきっかけに、安心安全な環境づくりを目指して「湯の坪まちづくり協議会」が発足。同協議会での協議をもとに、景観計画を定めるための委員会として「湯の坪街道周辺地区景観づくり検討委員会」が発足し、湯の坪地区での景観ルールづくりが行われた。2008年(平成20年)に「湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定」が策定され、景観計画区域内の建築物や工作物に一律に課せられるルールや、住民が守るべきルールが設定された。また、法的な強制力はないものの、地域の申し合わせとして守つ

表1 ① 交通社会実験の概要

実施概要	1. 中心部へ流入する観光自動車を減らす実験	①パーク&バスライド実験 ②パーク&レールライド実験 ③田園地区に無料駐車場設置実験
	2. 中心部内の観光自動車の無駄な動きを減らす実験	④駐車場予約システム実験 ⑤観光バス乗降システム実験
	3. 歩いて楽しいみちをつくる実験	⑥観光自動車の乗入制限実験 ⑦レンタサイクル実験
	4. その他の関連実験	⑧実験関連情報提供システム ⑨実験関連各種サービスの実施 ⑩景観に関する実験
交通実験の結果 ～各実験メニューの利用者・交通量の変化～	2日間で約350,000人の観光客と延べ1,412人のボランティアスタッフが、交通実験を体験しました。またパーク&ライド実験や田園地区駐車場によって、全体の約1/4の車が盆地周辺部に駐車し、中心部への集中を緩和させることができました。	
交通実験の評価 ～交通実験をしてわかったこと～	①様々な実験メニューを組み合わせた「パッケージ型」の交通実験をすることで、総合的な効果が得られた。 ②湯布院のまちが「歩いて楽しむまち」であることについて、総論としての賛成が得られた。 ③町民ボランティアの多数参加と多彩なメニューの総合的実施は、我が国随一の実験であった。	

出典：『湯布院・いやしの里の歩いて楽しいまちづくり交通社会実験の実施』

表2 ② 調査事業の提言

課題解決1 地域の持続的な活性化のためには自立した地域産業の存在が鍵	→地産地消を目指して、農業、商業、観光業が同じ土俵で取り組む ●地域を持続させるために農業も観光客も活かす ●「食」をキーワードに、農業、商業、観光は地元での経済への波及を優先する
課題解決2 滞在型観光と通過型観光のどちらを目指すのか?	→持続する観光地として、統一感のある湯の坪街道を目指す ●当地の暮らしと経済が持続していくための滞在型観光 ●時間をかけて湯布院を味わう仕掛けづくり
課題解決3 駐車場の増大化をどうするか?	→安心してゆっくり滞在できる湯の坪街道をつくるために ●観光客が車を敬遠する意識を醸成する
課題解決4 地元住民対象の既存商店街をどう再生するか?	→地元事業者の新たな事業展開、雇用創出を図る ●観光客対象の小売業や宿泊施設対象のサービス業の開業 ●ふるさと文化交流事業は、地域の事業者が暮らしと事業活動を一体化できる

出典：『観光環境容量・産業関連表分析調査及び地域由来型観光モデル事業報告書(概要版)』由布院温泉観光協会をもとに一部筆者が再整理

表3 ③ 2018年に示された基本方針

宿泊施設や物販・飲食施設といった観光関連施設について、周辺店舗や地域全体に溶け込めるよう開発規模を3,000㎡(延床面積)以下とすることを基本とし、外観については「由布院盆地景観計画」および「湯の坪街道周辺地区景観計画」の基準を遵守するとともに、これまでの由布院における商売に対する考え方や行動を守っていくことが大事となる。

また、宿泊施設については、由布院観光を持続可能な地域とするため、従前より調整を図ってきた開発規模である15室程度(最大で30室程度)とすることを基本とする。

ていくマナーとして「紳士協定（おもてなし協定）」が取りまとめられていることが特徴的である（図2）。

なお、景観に関しては、由布院としてあるべき風景をつくるための建築デザイン上の心得を示した『ゆふいん建築・環境デザインガイドブック』（注4）も策定されている。旧湯布院町では、1990年（平成2年）に自然環境や景観、風紀を守るための大規模な開発を抑制してもらおうという「成長管理」という考え方を打ち出す『潤いのある町づくり条例』が制定されているが、小規模開発に関しては同ブックで方針を示している。さらに、2018年（平成30年）には、後述する『新・由布院温泉観光基本計画』で表3のような方針が示された。

4 「新・由布院温泉観光基本計画」の策定

環境変化を踏まえた
2000年代以降、多岐にわたる環境変化を経験している由布院。例えば、外国人観光客に関しては、客数（総数）が増加する中で（図3）、団体旅行から個人旅行へ、大型観光バスでの移動か

ら公共交通機関での移動など、様相も変化。静けさ、緑、空間を大切に長年まちづくりを行ってきたが、日帰り観光客の増加や、ごみのポイ捨て、キャリーケースによる騒音などの行動が、生活、観光の双方に影響を与えるなど、由布院が描いてきたまちの姿や過ごし方が必ずしも実現できていない状況にある。

また、観光に影響を与えた変化としては、挾間町、庄内町との合併（2005年）、リーマン・ショック（2008年）、熊本地震などの災害の発生などが挙げられる。2000年代以降は、地域内外のさまざまな環境変化とそれに伴う問題への対応も迫られた。

そうした中、2018年（平成30年）に由布院温泉観光協会・由布院温泉旅館組合は、

図2 紳士協定（おもてなし協定）の内容

紳士協定 E. (おもてなし協定)

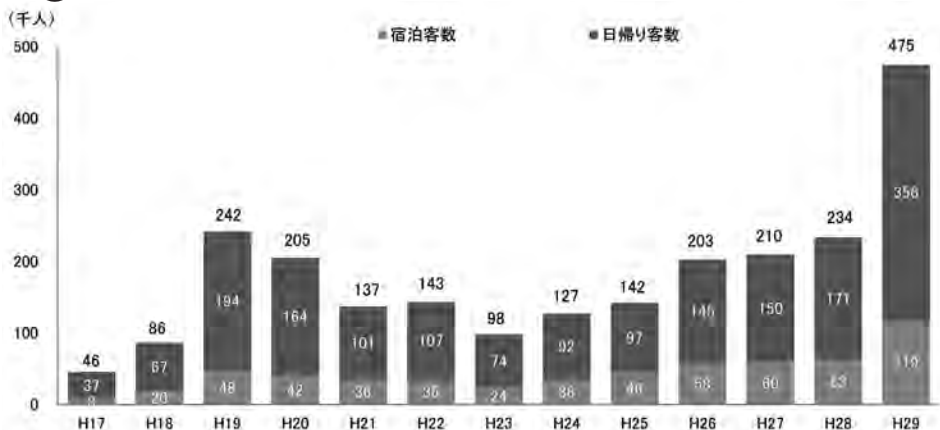
法的な強制力はありませんが、地域の申し合わせとして守っていくルール（マナー）です。皆様のご理解とご協力の上に成り立っていくものです。

- 声かけ・客引き** ・声かけ、客引き、ピラ配りはしてはけません。
- 試飲・試食** ・店外での試飲や試食の営業行為はしてはけません。
- 音楽・音声** ・店外まで聞こえる様な音楽や音声案内はしてはけません。
- 駐車スペース** ・お客様用や仕入れ業者用の駐車スペースを確保し、交通の妨げにならないように努めて下さい。やむを得ず駐車する場合は、なるべく道路の端に寄せて停めるよう努めて下さい。

出典：「由布岳を望む誰もが安らげる湯の坪街道周辺地域づくりのために『湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定（概要版）』（湯の坪街道周辺地区景観づくり検討委員会）」

「由布院温泉観光基本計画」（1996年に策定）の見直しを行った。20年以上が経過した同計画は、課題認識およびそれに基づく取り組み内容に現状との乖離が生じていた。また、関係者間での議論が以前に比べると少なくなっていることや、由布院の外から参入してくる事業者が増えていることなどから、由布院が目指すべき方向性が共有できていないという現状があった。

図3 由布市の外国人客数



出典：「由布市観光動態調査」（由布市）」

そこで、由布院観光を取り巻く環境の変化から生じた各種課題を明確化した上で、改めて由布院が目指す姿とともにその実現のための取り組みを示すことを目的に、由布院温泉観光基本計画の改定が行われた（表4）。

表4 「新・由布院温泉観光基本計画」の概要

由布院を取り巻く環境の変化	(1) 外国人観光客の増加/(2) 入込み客(日帰り客)の増加/ (3) 熊本地震等の災害の発生/(4) 外部からの参入の増加/ (5) 観光まちづくりの手法の変化
由布院観光の課題と方向性	1. 社会環境や外部環境の変化を踏まえ、受入態勢を強化しなければならない → FITの増加やフリーライダーを許さないための対応が必要 2. 過去を振り返り、未来を見つめ直さなければならない → これからも今のままでよいのか、何を変換していくべきかを検討することが必要 3. 目指すべき方向性を確認し、地域で共有しなければならない → 今後の目指すべき方向性、それぞれの役割を地域内で周知することが必要 4. 持続的な発展のために地域のルールを再構築しなければならない → 地域合意による計画に位置づけられた自主ルールや定量的な指標が必要
由布院観光の理念	① 由布院の観光を支える大きな柱は『自然』であり、大事に育まれてきた『環境』『景観』が最大の観光資源である ② 程よい大きさの由布院盆地の中で、生活のスケールに合った心地良さと生活を豊かにする小味で多様な魅力が安らぎの空間と個性あるまちを創る ③ 1人ひとりの顔が見える交流が、無限に広がる情報や物の流れの中から新たな価値を見出し、生活を豊かにしていくとともに、魅力あるものが創造されていく
由布院観光のコンセプト	『豊かな暮らしと交流が共存する滞在型保養温泉地』
想定する主要ターゲットの考え方	由布院観光の理念の通り、由布院の大きな魅力の一つは、由布院に住む個々の人の生き方がベースとして存在し、そこに様々な交流が生まれていることである。こうした交流から生まれる様々な価値を今後も大事にしていくためには、由布院の理念を理解し、共感してくれる人に由布院に来てもらうことが最も重要となる。
戦略	1. 由布院観光の魅力の根源である温泉滞在を地域一丸となって推進する 【滞在化推進戦略】 2. 由布院温泉での観光まちづくりを官民一体となって力強く推進する 【観光まちづくり推進戦略】 3. 由布院温泉の観光地としてのブランドや推進体制など観光基盤を整備・充実させる 【観光地としての基盤整備推進戦略】 4. 由布院温泉のインフラを含めた滞在環境を抜本的に見直し、強力で整備を推進する 【滞在環境整備推進戦略】

5 人口1万人の町での生活と観光

今後さまざまな問題、想定範囲を超える問題が発生する可能性があるが、まずは由布院のように、地域住民自らが主体性を持って、地域内外に意志を明示し、生活と観光のバランスも意識しながら、地域を創り管理していくことが重要だろう。今ある由布院の姿は、自然に生まれた姿ではなく、長年地域がまちづくりを行ってきた結果なのである。

他方、考えなければならないのは、我が国の観光地は、由布院のように小さな町(地域)も多いということである。地域自身が主体性を持って臨むのはもちろんであるが、小さな町の中力と努力だけでは解決に至らないことも多い。3.で述べた通り、由布院は各種対応を行ってきたが、今後もしこうした対応は必要だが、一方で小さな町での暮らしを守るためには、地域外の人の好意、善意と支援もなければ守っていけないと由布院は認識している。だからこそ、リーダーの中谷氏は「このように生きたいよね、一緒に生きる、出会った場所がこのようであるとどんなにか素晴らしい

しいよね」(注5)というストーリーを外部に対して発信し続けてきた。一緒に暮らす「生き方」、「出会い」の場所のイメージの共有が、由布院に関わる地域内外の関係者には不可欠である。

そして、我が国の今後の観光を考える際には、生活と観光のバランスや共存に向けた対応および管理を地域側だけに求めるのではなく、地域外も含めそれぞれの立場で地域への関与の仕方、果たせる役割、一つひとつの行動が地域に与える影響などをひとつと考えていく必要があるだろう。

(二) こと けんたろう

(注1) 215号では、米田誠司「2 観光とまちづくりの間にあるもの」由布院の四十年の足跡から見ること、223号では、桑野和泉「3 百年の計、変わらぬ思いと進化する由布院」、生野敬嗣「4 温泉地からの声 由布院温泉」を参照。

(注2) 桑野和泉「2009」：今後の観光庁及び観光政策に関する懇談会 概要「国土交通省、p.2 公開セミナー「由布院のまちづくり」に学ぶ」の講演録紹介「第4回」滋賀大学産学共同研究センター、p.1

(注4) 1998年に作成。2000年には、由布院温泉観光協会、旅館組合、商工会、地区住民、湯布院町役場で立ち上げた「ゆふいん建築・環境デザイン協議会」で議論を重ね、創り、守るべき「ゆふいんの風景イメージ」を形として町民に示すことを主眼に「町民普及版」を作成。2011年には増補改訂版が作成された。

(注5) 「第1回由布院スピリット研究会議事録」(公益財団法人日本交通公社、2010)より。